

川分圭子著

『ボデイントン家とイギリス近代』

——ロンドン貿易商 一五八〇—一九四一——

一 柳 峻 夫

本書は、ロンドン商人ボデイントン家に焦点を当て、三〇〇年以上の非常に長い期間を扱った研究である。タイトルから想像される商業史、社会経済史の枠にとどまらず、政治史、宗教史の領域にも踏み込んだ間口の広い研究でもある。著者川分氏は、イギリスの海外貿易を中心とする近代史研究者であり、多数の共著及び論文があるが、それらの研究の多くがボデイントン家に関わっており、同家は著者の研究において中心的役割を果たしていると言って良い。

本書は、序章と終章を含めると全部で二六章から成り、さらに短いコラムが三つあるという非常に大著であり、頁数は七二〇頁に及ぶ。評者は、ブリストルの海外貿易を主に研究しており、政治史や宗教史については不勉強なため、理解不足の部分も少なくないと思われるが、本書評では、まず、評者の所感も交えながら各章の重要と思われる論点を紹介し、最後に、本書全体についてコメントしたい。

評 書

本書の構成は、以下のとおりである。

序章

第一部 信仰と民主主義と資本主義——一七世紀の市民層

第一章 一七世紀のロンドン商人

第二章 ロンドンと革命

第三章 ピューリタニズムの敗北

第二部 特許貿易会社の活動とロンドン商人

第四章 レヴァント貿易

第五章 代理商と領事——レヴァント現地のイギリス人

コラム一 金融革命とボデイントン家

第三部 非国教徒たちの一八世紀

第六章 敗者の結束——共和政治家・非国教聖職者・信徒

による巨大親族網形成

第七章 名譽革命後の新旧非国教徒たち

第八章 ピューリタニズムの退潮と浮動する信者たち

第九章 ピューリタニズムの消滅と歴史的記憶の形成

コラム二 公益活動と文化活動

第四部 西インド貿易——近代資本主義最大の暗部とボデイン

トン家

第十章 西インド貿易への参入

第十一章 七年戦争後の新英領ウインドワード諸島の土地販売とボデイントン商会

第十二章 奴隷貿易廃止時代の西インドとボデイントン商

会

第十三章 奴隷解放時代の西インドとボデイントン商会

第十四章 終焉——一九—二〇世紀転換期の西インド砂糖生

終章

一見してわかるように、本書は四部構成になっている。そのうち、第一部、第二部は一七世紀を、第三部、第四部は一七世紀から二〇世紀までを扱っており、内容的には第一部、第三部はボデントン家の信仰や政治活動に、第二部、第四部は事業活動に焦点を当てている。

序章では、まず本書の趣旨が明らかにされる。著者によれば、「本書は、ボデントン家というロンドン貿易商の一族を取り上げ、その一族の一七世紀から二〇世紀初頭までの思想や信仰、通婚関係、政治行動、事業活動などを調査して、彼らの家族史を総合的にたどるものである」(二頁)。著者は、ボデントン家が非国教徒かつ個人貿易商(パートナーシップ)であった王政復古期から一九世紀前半にとくに注目し、その時代を描くことで、現在私達が知っているのとは別の民主主義と資本主義の姿が見えてくるといふ。続いて、本書のテーマに関連する先行研究の成果が、政治史・中産階級史・非国教史、レヴァント貿易史、西インド貿易史といった分野別に提示される。最後に、家族史・個人史研究の史料や方法論について解説した後で、著者はボデントン家史の調査状況を振り返る。各種文書館史料、オンラインデータベースが詳しく紹介され、家族史研究の手引としても、非常に有益である。

第一部は、一七世紀のボデントン家を、社会階層、信仰、政治活動の面から論じている。第一章では、ボデントン家のロン

ドン進出の経緯、一七世紀のロンドン商人社会とボデントン家の位置づけなどが論じられる。同家第二世代のジョージ・ボデントン二世(以下、ジョージ二世と表記)は、筋金入りの非国教徒かつ清教徒革命支持者で、王政復古期には不遇であった革命期の政治家や聖職者の娘とあえて結婚した。彼はまた、レヴァント会社のメンバーシップを取得して正式に海外貿易商となった。ジョージ二世は非国教徒と海外貿易商になるという重要な選択をした点で、ボデントン家の礎を築き、路線を決定した。著者はピーター・アールやリチャード・グラスビの研究と自らの調査結果から、ボデントン家は当時のロンドンにおいては大商人ではないが、中小貿易商・国内卸売商・大手製造業者としては上層部に位置していたと結論づけている。

第二章では、ボデントン家のような強固な非国教家族と非国教コミュニティが生み出される契機となった、革命期のロンドン市政や長老派(長老による合議制の会議を核とした教会統治体制をとる)、会衆派(各教会が自立して会衆の合議制により教会運営を行う体制をとる)という宗派の形成過程が概観される。ヴァレリ・バルやロバート・ブレナーによれば、清教徒革命勃発後、ロンドン市政における支配層の交代が行われ、従来のエリートだった特許貿易会社のメンバーに代わって新興の大西洋商人や西地中海商人が主導権を握った。彼らはピューリタン信仰が強く、革命を支持する傾向があり、ボデントン家もそうした新興商人であった。革命期の同家については不明な点が多いが、ジョージ一世が居住していた教区の議事録、ならびに彼らの姻戚スキナー家に関する情報などから、彼らは穏健なピューリタンで、教区では

リーダー的立場にあり、民主的かつ無難に教区の役職をこなしていた、と著者は結論する。

第三章は、王政復古から名譽革命の時期の宗教政治史を概観し、ボディントン家の人々がこの時代をどのように生きたのかを考察する。ピューリタンたちの努力にもかかわらず、エリザベス朝時代の国教会（高位聖職者の監督権が強力で明確な上意下達の階層構造を持つ）体制が復活して一六六二年の信仰統一法が制定されるに及び、大量の新教非国教徒が発生する。著者の調査により、ボディントン家はおそらく同法と同時に非国教徒となり、一六七〇年代前半までは長老派に属するも、その後は穏健な会衆派に転向したことがわかる。名譽革命によっても長老派が期待した国教会への「包含」は実現せず、会衆派が支持する寛容政策（信仰の自由を容認）がとられたことにより、長老派の敗北が決定し、同派の長期低落傾向が始まる。

第二部では、ボディントン家とレヴァント貿易との関わりが論じられる。第四章は、イギリスのレヴァント貿易の全体像、レヴァント会社の仕組みなどを解説し、ボディントン家の強引な参入を描いている。レヴァント貿易に将来性を感じたジョージ一世は、長男ジョージ二世を購入（入会金の支払い）によりレヴァント会社のメンバーにして、次男トマス一世をアレppoに派遣したのだが、トマス一世は無免許で貿易を行い、なし崩し的に会社のメンバーになった。史料に基づいてこのプロセスを実証する部分は、実に興味深い。その結果、ボディントン家は、一七〇〇―一三〇年頃には会社の中でもかなりの力を持つようになっていたようである。

第五章では、レヴァントでのイギリス商人の生活、仕事の様子、ボディントン家の事例を通して再構成される。先行研究がほとんどない領域だけに、情報としても価値が高いが、同家文書などに基づいて生き生きと描写され、読み応えがある。ジョージ二世は、肉親以外の身元の特定できる徒弟を全て新教非国教徒から採用している。他方、彼の娘婿ロバート・ウェイクマンとその従兄弟ウィリアム・ヘッジズはレヴァント会社の重要メンバーであったが、二人とも非国教徒ではなく、ボディントン家のコネクションが非国教徒一辺倒ではなかったこともわかる。ジョージ二世の末子ベンジャミン一世は、レヴァント貿易の衰退期にこの貿易に携わったが、帰国後はこの貿易から手を引き、西インド貿易など他の貿易分野、金融・保険会社に投資したことが示唆される。

第三部では、ボディントン家および姻戚の信仰、政治活動が論じられる。第六章は、ボディントン家の重要な姻戚であるスキナー家の姻戚関係、人的ネットワークを調査し、非国教徒の数十家族からなる親族網が形成されたことを明らかにする。スキナー家は多数の家系を含む大規模で強固な非国教親族網を形成しており、ボディントン家は同家と婚姻することで、オリヴァ・クロムウェルの一族など多くの名士を含む巨大な非国教徒コミュニティに接続したのである。

第七、八章では、ボディントン・スキナー家の事例を通して、名譽革命体制下での新教非国教徒の生き様が描かれる。第七章は、一七世紀末から一八世紀前半を取り扱う。長老派と会衆派の分裂後、ジョージ二世は会衆派、弟ジェイムズは長老派を支持し、彼らの子孫も一七四〇年代まで各々の宗派に属した。スキナー家で

は、第一世代ニコラス・スキナーの最初の結婚でできた子どもたち、その子孫の多くが会衆派を支持した。著者は、ボディントン・スキナー家の人々が所属していた礼拝所を調査・整理し、圧倒的に長老派と会衆派の聖職者と関係していることを明らかにし、両宗派は対立しながら最も関係が深いと指摘する。

第八章では、一八世紀後半の非国教衰退期におけるボディントン・スキナー家が論じられる。この時期には長老派と会衆派の教義は乖離が進み、長老派は三位一体を否定し、理性主義的なユニテリアニズムに移行するが、ボディントン家は会衆派から離れてユニテリアンとの交流を深め、正統的なカルヴァン派信仰から脱却していく。ボディントン・スキナー家は非国教徒の政治的利害実現に尽力し、審査法や自治体法の廃止を目指し、PDD（新教非国教徒代表団）にも積極的に関わった。その過程でサミュエル・ボディントンは有力政治家フォックスやホランド卿に接近し、姻戚関係を結ぶ。その結果、彼の子孫は国教徒となり、ボディントン家は通常の支配層に融合する。

第九章は、ピュリタニズムが消滅する一九世紀を中心に論じる。著者は、ロンドンの礼拝所の消滅状況を調査し、衰退する非国教の中でも、長老派が最も減少し、一九世紀にはほぼ消滅すること、会衆派は一七七〇年代から福音主義の影響下に活性化し、勢力を回復していることを明らかにする。そうした背景の中、ボディントン・スキナー家は一九世紀前半から中葉にかけて国教化し、第六世代以降は国教化が顕著に進行する。旧非国教勢力の後退と同時に、歴史的記憶の維持と再生産のための活動は盛んになり、非国教徒は一七世紀史の語り手として活躍するが、彼らの多

くがボディントン・スキナー家と深い関わりを持ち、親族網の一員である場合もあった。

第四部は、ボディントン家と西インド貿易との関わりを論じる。第一〇章では、一七世紀後半から一八世紀末までのボディントン家の西インド貿易が取り上げられる。同家がこの貿易に本格的に関わるのは、ポール家と姻戚関係を結ぶ一八世紀中葉以降であるが、それ以前から、ジョージ二世が西インドへの輸出や砂糖の委託販売を行っていた記録がある。ボディントン家の西インドとの関わりは深くなく、本格参入以降も西インドに長期滞在することにはなかったが、それは、姻戚であり事業パートナーでもあるポール家やメイトランド家が西インドと強固に結びついていたおかげであった。また、ボディントン家は、プリストルの有力大西洋貿易商であるピニー家と密接に関係し、ピニー商会のメインバンクであり、海上保険仲介などを行っていた。著者は、ボディントン家が西インドプランターの遺言執行者に指定される事例を多数紹介し、同家がプランターから絶大な信頼を得ていたことを実証する。

第十一章は、七年戦争後、イギリス政府が割譲諸島の土地販売を行った際、担当者の植民地官僚ウィリアム・ヤングが売上金額を政府に納入できず、彼と取引のあったボディントン商会が政府との交渉を行った事例を取り上げる。ボディントン商会はヤングから債権を回収する一方、彼の家族に対する信託管理人となり、ヤング家を保護した。ヤングのような借財を抱えたプランターは、取引先の貿易商に全面的に依存し、ボディントン商会の行動は、プランターに融資した自らの資本を守るという意味合いがあった。

第二章は、サミュエル・ボディントン（一七六六—一八四三）の時代のボディントン商会の事業活動、奴隷貿易廃止やロンドン港改修といった深刻な問題へのボディントン家の対応を検討する。当時のボディントン商会は、海上保険仲介と総合的コミッション・ビジネスを主要業務とした。奴隷貿易廃止論争では、サミュエル・ボディントンと事業パートナーのリチャード・シャープは、当時の西インド利害関係者の大勢に従い、西インド委員会では奴隷貿易廃止に反対しながら、下院議員としては賛成した。ロンドン港改修問題では、ロンドン・ドック（すべての外国貿易が利用）と西インド・ドック（西インド貿易専用）という二つの案が対立し、両方とも建設されたが、西インド以外の地域とも貿易を行い、新教非国教徒としてのコネクションがあつたボディンソン家は、ロンドン・ドック支持グループの中心メンバーだつた。

第三章は、奴隷制廃止とその後の数十年間、砂糖プランテーションの不況と再編の時代にサミュエル・ボディントンとボディントン商会がどのような活動を行っていたかを検討する。当時のボディントン商会はプランターに対する債権者という立場で奴隷賠償金を取得していた。著者はサミュエルの遺言を分析し、有償労働体制に移行した一八四〇年頃においても、彼は砂糖生産の収益性に期待していたという（とくにトリニダードとガイアナ）。ただし、樂觀視はせず、甥トマス六世には安全な資産しか直接遺贈していない。

第四章は、英領砂糖植民地の深刻な衰退期を取り上げる。著者は、ボディントン商会が一九〇六年にアンティグアの広大なプランテーションを売却した事実を指摘し、彼らはアンティグア中

央製糖所の設立をプランテーション売却の好機と捉えた、と解釈する。本章の調査結果から、著者は、「奴隷貿易廃止・奴隷制廃止の背景には英領砂糖生産の衰退とイギリス工業利権の成長があり、イギリスはそれゆえに自由貿易主義を採用し植民地を見捨てた（五七五頁）」というエリック・ウィリアムズの主張を基本的には支持しつつ、自由貿易主義を奴隷貿易廃止に当てはめるのは時期的に無理があると指摘する。

終章では、本書が明らかにしたことと、著者の主張がまとめられている。著者は、イギリス本国での民主主義の発達に貢献した人間と、イギリス海外進出・経済成長の過程において利益を優先し非道な行動を等閑視した人間は同じであることを強調する。民主主義と資本主義は、参加者が自由に自己主張と自己実現を求める仕組みであり、ボディントン家の人々は、その枠組の中で、自己の利益を実現するために、勤勉に活動した、と著者は結論する。

本書はイギリス海外貿易の研究としては極めて画期的と言える。伝統的な貿易史研究は、関税簿などの港湾史料などに基づいて統計を作成し、国や港湾というマクロレベルで貿易量・貿易額の増減を分析するという方法が主流であつた。近年では個々の商人の実務に焦点を当てたミクロレベルの研究も少なくないが、主に元帳や出納簿といった営業史料の分析である。本書はレヴァント貿易や西インド貿易を扱った商業史研究でもあるが、営業史料を残していないボディントン家を素材としている点に大きな特色がある。著者は二次文献を援用しつつ、書簡などの家族文書、政府文書、新聞雑誌、取引先商人の文書などから同家の事業内容を再構

成しており、事業文書がなくてもこれほど多くのことが明らかにできるのかと驚かされた。本書はプロソボグラフィの手法を取り入れ、家族史研究と融合した商業史研究の新しい方法論を提示しており、この分野の研究のさらなる進展と新たな可能性に道を開いた点は、研究史上の重要な貢献である。

本書の最大の意義は、今までにない規模でボデイントン家を調査したことであろう。一つの家族を三〇〇年に渡って取り上げ、事業、政治、宗教と多面的に、なおかつ高度な実証水準で検証した研究は、日本のイギリス史では前例がない。家族史の手法によるボデイントン家と姻族のメンバーの綿密な調査と分析は、同家が体現したイギリスの民主主義と資本主義の本質を鮮やかに照らし出してくれる。研究史の手薄な領域に光を当てた点も、本書の大きな功績である。第五章は、ボデイントン家のメンバーの事例に基づき、あまり知られていないレヴァントでの商人のビジネスや生活の実態を描写している。第三部では、日本ではほとんど研究されてこなかった一八世紀のピューリタニズムの実態が、ボデイントン家を通して詳細に論じられる。第四部の第二章以降では、奴隷制廃止後の西インド植民地、貿易の実態が解き明かされるが、これも先行研究がほとんどない分野である。評者は、本書の各章から多くのことを学ぶことができた。

本書はさきわめて長大で章数も多く、内容も経済、社会、政治、宗教と多岐に渡るが、全体が有機的に構成されており、著者の論旨は明快で晦渋さはない。史料・文献は、非常に広範かつ丹念に渉猟され、厳密な史料批判を経て使われており、著者の長年に渡る綿密な調査・研究活動が伺える。本書のような研究においては、

調査の過程で同姓同名の人物に遭遇することが多く、人物の同定が困難なことは、評者も経験上痛感している。その点、著者は十分な史料の裏付けを取り、慎重に留保を重ねながら論を進めており、学問への真摯で誠実な姿勢が随所に感じられる。

評者は海外貿易が専門で、とくに宗教史には疎いのだが、読んでいて最も引き込まれたのは、宗教を扱った第六章であった。ボデイントン・スキナー家の巨大な親族網が形成され、ピューリタン信仰が再生産されていく過程を実証的に論じていく本章は、非常に読み応えがあった。あえて難点を挙げれば、家系図が参照しにくかったことである。本書は家系図が多く、それを頻繁に参照しながら本文を読み進める必要があるが、これだけ多くの家系図が巻末に綴じ込まれていると、参照は容易ではなかった。出版の都合上やむを得なかったのだろうとは推察するが、家系図だけは別冊になっていた方が、読みやすかったと思う。

個人的には、ボデイントン家が中産階級であり続けた理由や背景について、著者の見解が知りたかった。著者によれば、同家は一七世紀から一九世紀まで非国教信仰を固持すると同時に中産階級であり続け、これは彼らに身分上昇の意志がなかったからだという。この点は本書が十分に論証している。そして、彼らが非国教徒でホイッグを支持するという宗教的・政治的立場を取り続けた理由も本書の中で説得的に論じられている。さらに本書では、ボデイントン家の人々は国教に転向して貿易活動をやめた後も、事務弁護士や国教牧師、軍人といった中産階級のプロフェッションに就いたことが明かされる。

中産階級（ミドルクラス、中間層、中流階級）とは、地代収入

で生活する貴族・ジェントリといった地主エリート＝伝統的支配階級と労働者階級の間に位置する階層を指す。そこには、ボデントン家のような海外貿易商や産業資本家、さらには医師、弁護士といった知的専門職などが含まれる。彼らはイギリスの海外貿易成長、産業革命をリードし、経済力とともに政治的発言力を増して議会にも進出し、一九世紀には選挙法改正、審査法・穀物法・航海法の廃止といった自由主義改革にも大きく寄与する。近代イギリスの経済成長、民主主義・自由主義の拡大において中産階級が看過できぬ影響力を発揮したことは明白である。他方、彼らと地主エリートとの間には親和性があり、成功した貿易商や産業資本家が土地を購入して地主化し、ジェントリに身分上昇するケースも少なくなかった。しかし、ボデントン家の人々はそのような道を選ばなかった。彼らがこれほどの長期間に渡り中産階級にとどまり続けたのはなぜだろうか。著者は同家のような近世からの中産階級が近代を通して中産階級であり続けようとする苦闘を近代史の原動力として重視しているだけに、その点についてもっと検討があっても良かったように思う。

本書を読んで強く感じたのは、ボデントン家についてもっと知りたい、深く理解したい、という著者の飽くなき探究心と情熱である。このような強い思い入れがあったからこそ、著者は三〇年近くボデントン家について調査・研究を続けることができたのだろう。著者と比べるのもおこがましいが、評者もブリストルの商家について調査したことがあり、著者の研究がどれほど大変で、膨大な時間と労力を要したかは、ある程度わかっているつもりである。本書は、史料研究・実証研究として学術的価値が高い

だけでなく、著者の研究者としての生き様がにじみ出た良書である。

(A5判 七四八頁 二〇一七年二月
京都大学学術出版会 六〇〇〇円＋税)
(帝京平成大学現代ライフ学部観光経営学科准教授)